

Moje West Chronicle

<http://www.m21.or.jp/clubfame/mojoproject/>

phase 15

VOX HALL (BIG BANG) ①

伝説のジャズ喫茶。
その名の上に。

「SNCE 1989」'65年当時、京都の高校生4人が「サリーとブレイホーイス」 というバンドをスタートした。そのバンドは、後にフアンニスと改名し、ひとりの少年をスカウトする。'66年に新メンバーを迎え、5人となったそのバンド、引き上げられたプロダクションはかの「渡辺プロ」。後のそのバンドのプロデュースを務めたのが作曲家・すぎやまこういち氏である。今で言うメジャーデビューは'67年、デビュー曲は「僕のマリー」。飛び馬を落とす勢いと、生き馬の目を抜く勢いを併せ持つ化け物GSグループ「サ・タイガース」の誕生である。すぎやまこういち氏に命名されたそのバンド、最後にスカウトされたヴォーカルこそ、鴨沂高校出身の沢田研二その人である。彼がハウスバンドのヴォーカルとして歌っていたジャズ喫茶「田園」。文頭の年号は、その「田園」がオープンした年である。現在は移転した形となっており、看板は「ロビン・ロビン」業態はハブとしてあるが、今回紹介するライヴハウスがあるビルに足を運べば、その地下にその伝説の名を見ることが出来る。

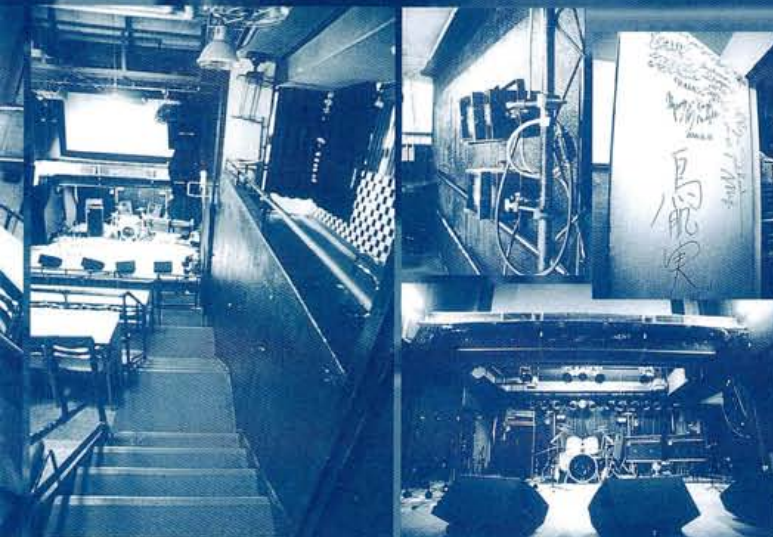
正確に言えばことは、
ライヴハウスではなかった。

同ビルの4階に、VOX HALLはある。かつて、そこには「BIG BANG」というライヴハウスがあった。スタート当時、BIG BANGはビル直営であった。正確にはライヴハウスではなく、イベントホールという位置づけである。やはり京都は学生の街、飲食部門も、物販部門も、ビル全体が「学生からの情報発信」あるいは「学生たちの情報源」という大きなコンセプト下にあった。飲食部門に包括されたロビン・ロビンが狙った役どころには「文化系サークルの発表の場」という性格もあったわけである。

2フロアを使ったホールはステージを底辺に、急な勾配で客席が連なる独特な造りを持つ。最後列の観客は、かなりステージを見下ろすことになる。確かに、ライヴハウスとして見れば変わった造りである。当時のマネージャーで現S.D.O.の社長・後藤氏は言う。「何にでも対応できるホールというのが前提にあったからです。ステージ背面にはスクリーンがありますから、16ミリフィルムの上映もできる。プロジェクトを併用したライヴもできる。ステージの前には市松模様のフロアがあって、その真上にはデイスコ照明があって、デイスコとしても使えました」ところが前述のロビン・ロビンなどは、飲食店としてロビン・ロビンに比べてステータスがあったとも。何ともあれ「知名度を上げること」。これがまず、BIG BANGに課せられたテーマであった。コンセプトとビジネスのバランスを考えれば、順当な考えだ。

80年代という時代に、
生まれたという意味。

BIG BANGの出演者リストが今でもVOX HALLに保管されており、オープン当初の82年のページにはカシオペア、スクエア、スターダストレビューなどの名前がある。前回までに紹介した「ロビン」で聞いたクロスオーバー



政治で
わたしは
変わらない。

ーやフュージョンという名で台頭してきた旗手の名前である。さらに、ジョー・ニューリスとチャー・シーナ&ザ・ロケッツ、原田真二、野村義男&グッバイ、大江千里、安全地帯など、ジャニーズが誇った「たのきんトリオ」の一角からエビっソニーの看板アーティストの名前までが並ぶ。みんが80年代を代表するアーティストである。中には藍井隆二やNITTLEなど、80年代の後半に火が付くバンドの名前もあり、そのブッキングは早いものだったと言えるだろう。2年後の84年になると、レベッカやバーソンス、バービー・ボイスやボウイの名前が登場する。後者の2バンドは動員者数がそれぞれ18人と109人とあり、全盛期を知る者には信じがたい数字かもしれない。デビュー直後のブッキングだったためだ。さらに89年には、GODFRICKERS、大江慎也、DE-LA-X、SHOW-YA、GARAPAGOS、SUCKERSなど、有頂天、コレクターズらの名前が並ぶ。

前回で検証した前述のクロスマーキーやフュージョンから、バンクムーブメント。そして「歌謡曲かロックか？」などという論争が現れ、さらにバブル景気と並行していわゆる「バンドブーム」へ入っていったのが、この80年代であった。今では当たり前の言葉となった「インディーズレーベル」という名前が出てきたのも80年代の中頃で、ヴォーカルのケラ（現ケラリーノ・サンドロヴィッチ）が率いた有頂天や、同じくヴォーカルの大槻ケンヂが率いた筋肉少女帯などを擁した「テコムレコード」はその最たるものである。バブルに浮かれ、POPやR&Bやhard rockなどのファッション誌がバカ売れしたと同時に、JICC出版局の「宝島」がサブカルチャーを一手に背負った。そんな時代であった。ちなみに、現在は「L'AMONTOOC」という劇団を主催するケラは、最近その名も「1980（イチキューハチマル）」という映画を撮っている。

バンドを育成すること、知名度を上げること。

企画室が編成され、これから伸びていくアーティストにステージを与えるためのイベントも計画された。「Sound On Wave」というイベントがそれで、1回目に出演したバンドは爆風スランプ、レベッカ、バービーボイスといった面々。当時の八潮遊園の野外ステージを使用し、観山電鉄の臨時列車を用意し、大規模なイベントとして行われている。前述の後藤氏は言う。「京都というのには不思議な街で、非常に食いつきが悪い（笑）。大阪や名古屋では（観客が）入るイベントやライブでも、京都ではなかなか入らないんですね。これは致し方あるまい。京都人の典型的な、思慮深い、悪く言えば腰が重い行動傾向である。対応策として、週末のディスコ営業には、件のレベッカ（レベッカに関しては特に、レーベルの大坂担当者から強力なプッシュ）と応援要請があったという）の音源を流してバンドそのものの知名度の向上を狙った。そんな努力の甲斐もあり、京都地区がかなりの成績を上げたという。その数年の歴史の中で、ブッキングマネージャーと東京のプロダクションとの「ネグション」の繋がりがも深くなった。

バンク、ニューウェーブ、ハードロックにメタル。

当時のライブハウス事情を振り返ると、3000人を動員できる、レコード会社のプロモーションが可能なライブハウスがなかったことも、田中

BANG成功の理由に挙げられるようだ。ブルース系のバンドには熾盛というメッカがある。そして当時主流を占めたポップ系（ウエストコースト系のポップサウンドを持ち込んだナイアガラトライアングルの山下達郎や大滝詠一、佐野元春、杉真理。後の大江千里など）のアーティストや、セミアプロアマチュアは、このBANGと今はなき「サーカス・サーカス」に出演の場を求めた。BANGでは70年代後半のソウルミュージックの系譜を踏襲する。京都産業大学出身のイタチ（後のTOPS）やSONDOLONGというバンドや、先述のサブカルチャー系、当時のバンクやニューウェーブ、さらにはハードロック系のアースシイカー、44マグナム、ラウドネスも台頭し、幅広いジャンルを包み込むハコとなった。神戸のライブハウス「チキンジョージ」を筆頭に大阪、名古屋、広島、静岡など、全国のライブハウス同士で情報交換し、バンドやアーティストを紹介しあっていた。プロモーターはさぞ助かったに違いない。ライブハウスがブッキングマネージャーをかって出たようなものだから。結果的にミュージックシーンの底上げを狙った事に間違いはないだろう。「出演する側もライブハウスも勢いがありましたね。後藤氏はそんな記憶で結んでくれた。

ひとつ歴史が幕を閉じ、その意志は継がれていく。

だがBANGは92年、その歴史の幕を閉じる。現在は「BANG」の管轄となっており、名もVOX HALLと改めている。その直接の原因には、様々な要素がある。中でも重要だったのは、「当初の目的である何でも出来る『学生からの情報発信』『学生たちの情報源』という目的が達成できなかった。何でもできる、ということとは、専門的ではないことだった、ということか。『ライブハウスである以上、いかにアマチュアをステージに上げられるかという事も目的であるはず。その育成ができませんでした』ということであった。

後藤氏としても手をこまねいていたわけではない。「MUSIC CIRCLE「BANG」という各大学のサークルから代表を選出し、トーナメントを行い、その優勝バンドはBANGが責任を持ってプロデュースしてデビューさせるという企画も立ち上げた。「CHICKEN DANCERS」という立命館大学出身のバンドが優勝。91年7月21日にイチキレコードから公約どおりデビューした。だが後藤氏は89年3月の同バンドの優勝を見届けた後、そのデビューを待たずにBANGを離れている。自戒を込めて言う。「ライブシーンとしてはある程度成功することができました。でも情報発信をもっとしたかった。今は『そのお手伝いを少しでもできたね』と、ミュージックスタジオを経営しており、定期的にVOX HALLでイベントも開催している。

to be continued...

VOX HALL

京都市中京区河原町通三条下ル一筋目東入ル
VOXビル4F
075・255・1596
10:00~22:00/不定休
※ライブ時間は要問い合わせ
<http://www.jeugia.co.jp>

